

世界に開かれた北海道

帯広市 前市長 砂川敏文

砂川敏文(すながわ としふみ)

- 昭和23年(1948) 1月 香川県大川郡志度町生まれ
- 昭和41年(1966) 3月 香川県立高松高校卒業
- 昭和45年(1970) 3月 帯広畜産大学草地学科卒業
- 4月 農林省入省
- 昭和47年(1972) 4月 北海道開発庁出向
- 平成9年(1997) 10月 農林省退官
- 平成10年(1998) 4月 帯広市長就任
- 平成22年(2010) 4月 帯広市長退任



世界の友達

東日本大震災の状況が広く世界中に知られることにより、世界の各国、世界の人々から、多くの温かい激励や心強い支援が寄せられています。

民族や宗教を越えて、世界中の人々が日本に関心を寄せ、その復旧・復興に力を尽くそうとしてくれています。その中身は緊急援助に始まり、資金、技術の提供や応援のメッセージなど様々です。特に開発途上国から多く集まっているといわれています。本当にありがたいことです。

これは日本がこれまで途上国の発展に関わり、長年におたつて資金や技術・人材の養成などの貢献を続けてきていることに因るものと思います。そうしたことから、日本に対する親近感や信頼感が醸成され、人と人との良い関係が築かれているからだと思います。

「世界に良い影響を与えた国は？」という調査で、日本は

No1と評価されているそうです。また、「他人に対してもっとも親切な国は？」という調査では、日本をあげた人が約七割に上り、世界各国、地域のうちで圧倒的トップだったとも報道されています。世界中の人々の日本に対する好感度は、われわれ日本人が考える以上に高いようです。

JICA（国際協力機構）帯広センターにも、帯広で研修生活を送った世界中の研修生OBからの激励の手紙などが展示され、それは三九カ国・一〇二件に及ぶそうです。まさに世界の友達です。日本を、日本人を理解してくれる人々が世界中にたくさんいることは本当に心強いものです。こうした友達をどんどん増やしていきたいものです。

情けは人のためならず

日本人に対しては「極東の小さな島国に住む閉鎖的な民族」という評価があるかもしれませんが。江戸時代のいわゆる鎖国政策のイメージが強いことからくるのでしょうか。私はそうした評価が妥当だとは思っていません。

島国であるということは四方海に囲まれているということです。海は古代以来、人々の行く手を阻む障壁ではなく外の世界への大路でした。陸路を行くよりはるかに安全で早く、しかも大量の移動に適していました。日本人そのものも東南アジアや中国大陸、朝鮮半島やロシア沿海州サハリンから海を渡って日本列島に住みついた人々の子孫といわれています。

中世まで、日本列島の西と東では住民の気質や産業構造に大きな差異があつたといわれています。西国と東国というように、別の国のような趣であつたという人もいます。朝鮮半島、琉球列島や台湾、大陸の沿岸部さらに東南アジア方面との通商交易で富を蓄えた西国。沿海州やサハリン方面との交易も重要ではあつたが、基本的には一所懸命に土地を耕して力を蓄えた東国。といった感覚でしょうか。戦においても、西の水軍、東の騎馬軍団という印象があります。

いずれにしても、歴史的に見て日本人は小さな島に閉じこもつた閉鎖的な民では決してないことは明らかです。また、豊かになつた日本はODA（政府開発援助）などを通じて、途上国の発展や民心の安定に長年にわたつて貢献してきました。国際紛争や国内の宗教的な対立、その原因の多くは経済的な貧しさからくることを考えると、このことは世界の平和と安定に与かつて力があつたと、私は考えています。ですから、近年ODAの予算が削減されてきていることは、その果たす役割の大きさに堪がみて大変残念です。

JICAの諸事業のうち、特に日本国内における途上国の人の研修は大事だと思えます。近い将来各国の枢要の地位を占める人々の中に、日本に対し理解を示し、シンパシーを抱く人を沢山誕生させるからです。日本の長期的対外戦略の重要な一環です。こうした海外でのお付き合いは政府間に限るものではないことはいまでもありません。多方面にわたるきめ細やかな対応は自治体間や地域間、あるいは民間同士

ほうが得意だと思います。

帯広市の経験

帯広市は国際交流を積極的に進めています。アラスカ州のスワード市とは四〇数年来の姉妹都市ですし、遼寧省の朝陽市とは一〇年前、ウイソコンシン州のマジソン市とは五年前に友好都市・姉妹都市の関係を結びました。最も新しいマジソン市との締結についての話し合いの中で「世界中に多くの姉妹都市を持つているが（十一都市）、そのことが世界の平和に地域として貢献することにもなる」という先方の言葉に共感したものです。

スワード市（アラスカクルーズの拠点。観光と水産の街）とは長年にわたり高校生の交換を続けており、親子二代の帯広経験者が沢山います。

朝陽市（燕の古都、新興の工業都市の側面も）とは高校生との交換のほか、JICAの地域間プロジェクトの一環として農業技術の指導や農村部の保健衛生改善・生活改善の指導に帯広市の職員が現地で頑張っています。

マジソン市（全米で最も住みよい街、発展する街に常にランキングインしている。州立大学（UW）と州議会議事堂が有名）とは精神保健分野の先進的な取り組み（病院での隔離をやめ地域に帰す。それを支える住まいや仕事、ケアなどのハードおよびソフトのインフラを地域の中に整備し、地域全

体で支えていく）に基づく地域実践経験の交流が民間ベースで進められています。こうした実践の日本での先進地は帯広であり、世界の先進地がマジソンなのです。また、大学の研究成果を事業化し、地域の発展に結び付けているUWに帯広畜産大学が学ぼうとしています。

帯広畜産大学は対外交流に力を入れており、「河本基金（公益信託河本記念北海道・新疆ウイグル開発技術交流基金）」と協力して、新疆ウイグル自治区の主要産業である農業や畜産業の発展を担う新疆農業大学の教官や自治区政府の行



帯広・マジソン姉妹都市協定締結式
双方の市長と交流協会会長



「世界の友達」の一風景(森の交流館)



市民との交流の一場面
(JICA帯広センター)

政官を、共同研究者や留学生として招く活動を二〇年来継続しています。これまで新疆から訪れた教授、研究員、学生は約五〇名で、帰国後はそれぞれ指導的立場で活躍しています。また、畜産大学から新疆に派遣されたスタッフは約四〇名に上ります。こうした地域間、草の根レベルの交流は、北海道と新疆ウイグル自治区間はもとより日中関係にも良好な影響を及ぼしており、大きな成果を挙げています。

帯広市のそして帯広市民の国際交流活動に関しては、JICA帯広国際センターが大きな役割を果たしています。ここ

には年間を通じて約五〇カ国二〇〇人の研修生が訪れます。稼働率は毎年八〇%に上り全国のセンターで常に一、二を争っています。彼らは全員が必ず一般市民の家庭でのホームステイを経験することになっています。また、来日のとときそれぞれの国の絵本を持ってきてもらって、帯広の子供たちに母国語で読み聞かせをしてもらいます。帰国のときには日本の絵本を持ち帰り、母国で紹介してもらいます。ホームステイのホストファミリーとして、また留学生の援助や交流などに多くの市民や市民団体が携わっています。

七月にはJICAのセンターとこれに隣接して設けられた市の施設である「森の交流館」で、研修生や留学生などと市民が参加していろいろな形で交流を楽しむイベント広場「世界の友達」が開かれ、毎年二、〇〇〇人の参加者でにぎわいます。

十二月には世界のワインを持ち寄って、ワインパーティが盛大に開かれます。これらを通して外国の人々に日本の文化や考え方、そして市民の生活を理解してもらえますし、市民も外国人と直に接することで国際感覚を磨くことに繋がります。



コロンビア政府からの感謝状の贈呈（国際協力新聞2007年冬号より）

す。帰国後も長くホストファミリーとメールのやり取りをし、持っている研修生OBも沢山います。まさに世界の友達の輪が広がっているのです。

JICAセンターでは多くの多様な研修コースが設定されており、地域の様々な機関や組織、団体の協力で運営されています。たとえば国別研修で南米のコロンビアを対象とした都市計画・土地区画整理の実践を学ぶコースです。講師陣の多くは、この分野で豊富な経験を有する帯広市の職員が勤めました。九年間にわたり毎年数人、合計六六名の技術担当官が帯広市の経験と技術を学んで帰国し、自国の多くの現場で実際に適用して、立派な成績を上げています。市の職員も計五名が現地に派遣され指導にあたりました。日本語の「区画整理」がそのまま現地語でも「クカクセイリ」として使われているそうです。今ではこの成果はコロンビアだけでなく、周辺のアンデス諸国にまで広く展開していると聞いています。そうしたことから、帯広市はコロンビア政府から感謝の賞をいただきました。その賞を市に持参した国家企画庁都市環境政策局顧問は、帯広でこのコースを受講した研修生OBだったのです。市の職員も自分たちの技術、経験を外国の人に教え伝えることで自信を持ち、資質の向上にもなっています。

環境に配慮した農業技術、土壌保全や土地改良、協同組合の活動など農業に関するコースも多いのですが、これらについては農協や開発局、道の研究機関の職員が活躍しています。原虫病に関するコースでは、各国の研究者が研修生として、

帯広畜産大学の原虫病研究センターで研究生を送り、途上国の畜産振興上の大問題である原虫病の克服に取り組んでいます。

JICAの国内研修事業は、「効果が目に見えない」「無駄が多い」と逆風にさらされていますが、これまで述べた帯広の例のように、直接的な途上国発展に欠かせない技術の移転と人材の育成だけでなく、地域と地域、人と人の間を結び、世界中に日本と日本人の友達の輪を広げていくという効果を挙げています。日本文化や日本人に親近感や尊敬の念を抱く友達を世界中に増やしているのです。友達は多いほうがいいと思います。いざというとき頼りになります。長い目で見て日本の国益に大きな貢献をすることは間違いありません。運営に工夫を加えながら、より一層充実してもらいたいと思っています。

北海道を世界へ、世界中から北海道へ

先日、伊能忠敬の測量図（大日本沿海輿地全図）の全図公開展示が帯広の森屋内スピードスケート場・明治北海道十勝オーバルでありました。大勢の市民でにぎわい予定の倍以上の入場者が有ったそうです。幕末期に測量隊を率いて、日本全国を实地踏査し、その後数十年、明治期まで実用された正確な全国地図を作り上げた忠敬。日本人のみならず諸外国人の、日本列島に関する地理学あるいは地政学的な認識を飛躍

的に高めたといわれています。その最初の踏査行は東蝦夷地でした。北辺防備の必要性が切迫し、東アジア、北西太平洋をめぐる国際情勢の中で、蝦夷地が焦点のひとつであったと思われまふ。その後、安政の開国では箱館が最初の開港地のひとつになり、外国との窓口が開かれました。明治の開拓使は北海道の拓地殖民のため、多くの外国人を招聘し欧米の技術などの導入に努めました。もちろん国内の諸地方からそれぞれの文化を携えて、多くの人が移住してきました。こうした歴史的経過から、北海道には異文化に対して寛容な、開かれた気風が根付いたのではないかと思います。

JICAの研修生の多くは、帯広での研修生活ではあまりストレスを感じないという感想を漏らします。冷涼で緑が多く人が密集しすぎないという気候風土とともに、こうした地域の開かれた気風が言わせるのでしょうか。北海道は日本の中ではいろいろな面で、グローバル・スタンダード（世界標準）に近い地域なのかもしれません。

美しい国土に恵まれて、礼儀正しく秩序を重んじる穏やかで信頼できる国民が、繊細で奥深い文化をはぐくむ国日本。「クール・ジャパン」。このような日本のプラスイメージをさらに高め、世界に発信するのに最も適し、そして力を持っているのは北海道であると思うのです。そのためにもっともっと北海道を世界に紹介し、もっともっと世界中から北海道を訪れる人を増やしたいものです。